

実践政策学の構図を考える —“Happiness is sharing”の方法—

延藤 安弘（特定非営利活動法人まちの縁側育くみ隊, endoh@engawa.ne.jp）

Exploring an overall framework of policy and practice studies: The development of “Happiness is Sharing” method
Yasuhiro Endoh (NPO Partnering to Nurture Community Engawa Design)

要約

実践政策学は、人間・環境・技術（制度）の3つが基本的に相互連関する「環境親和型社会」を目標とする、それが研究と実践において価値をもち実りあるものになるためには、研究と実践の幅広い概念化が必要とされる。コンセプトは、目的・手段・学習の統合であり、このことを生命のように大切にすること。いまひとつのコンセプトは、専門的研究者やプランナーたちが、自省的・感応的・文脈的思考とプランニングの知的生産に対して能動的にかかわることである。さらに実践政策学は、これまで研究機関と地域社会でしばしば分離されていた境界をつなぎとめ、知的生産の成果を相互に分ちあひ、協働しあひ、交換しあひ状況を促進する。実践政策学体験の最初のチャレンジは、“他者”をみることである。もし研究者やプランナーがまち育てにおいて“他者”と相互関係を紡ぐことになれば、彼らは自分自身の中にあるものとは違うアイデンティティや差異性を知り、かかわり、向きあうことになる。彼らは自己と“他者”のあわいをぼかし、アカデミアとコミュニティの境界を解くことになる。人間と環境の間の「幸せの分かちあひ」実現のためには、よき生に駆り立てる力、人々の心にふれる形、しなやかな技術（制度）の有機的結合が必要であり、そのことは生き生きとした生活、自由、そして持続可能な幸せの追求をもたらす。

キーワード

三次元相関, 自省, 感応, 文脈, わくわく&リーズナブル

1. 実践政策学のコンセプト—「何をめざして生きるんや」

実践政策学は、人間・環境・技術（制度）の三つが基本的に相互連関する「環境親和型社会」を目標とする。学が創造と持続を獲得するためには方法をもたねばならない。本稿の目的は、実践政策学が自（人間）、他（環境）、間（技術・制度）の「三次元相関運動体」を想定し、それらの連関・連動・変革の思考と実践の基軸と拡がりの方法枠組を明らかにすることにある。そこで本稿では実践政策学のコンセプト、次いでその知的生産としての特質、さらに実践政策学の構図のあらましについて述べる。

まずコンセプトから始めよう。高度に発達した技術管理社会では、手段が目的化する傾向がある。例えば、土地区画整理事業では、どんなまちにしたいかの生活者の視点からの目標（「ヒト・クラシ・チイキ」）を後まわしにして、土地・建物の測量から始まり、「モノ・カネ・セイド」優先のすすめ方になることが多い。実践政策学は目的・コンセプトを生命のように大切にすること。そのためには、目的・手段・学習の三次元相関を常に心に留めたい。

1.1 「よき生」（目的）とは何かを深める

生き生きした行ないと語られる言葉こそ、人間になしうる最も偉大なものだ。（アリストテレス）

アリストテレスの目的論的倫理学においてもっとも重要な役割を演じているのが「よき生」「幸福」である（桑子, 1993）。「幸福」（well-being）は、古代ギリシャの快

楽主義者が主張するように正しい主観的状态をもつことでもなければ、近代の厚生経済学が想定するような嗜好（preference）の満足でもない。それは、たとえば友達をもつ、美しいものや素晴らしいものを鑑賞する、自分の能力を発展させる、自分自身の生活を形づくるといった、個人がもつことのできる客観的な善（objective goods）である（オニール, 2011）。

実践政策学において肝にすえたい基本的すすめ方の第1は、人間と環境双方の幸せの分かちあひ（“Happiness is sharing.”）を目指すことである。この場合の環境とは、自然環境と人工環境だけでなく、人間関係も情報等も含む。人間と自然、人間と人間がお互い含みあう関係、人間—環境相互浸透関係、さらに人間—環境相互進化関係を最適化する手段としての技術・制度を柔軟に開発・応用していくことが肝要である。

1.2 目的と手段の間を推し測る

そのためには発想法において、目的と手段の両者を相互に向かい合わせる「間」なるものを推し測る思考がいる。目的と手段の間なるものを「測る」とは、単なる土地の測量ではない。マルティン・ハイデガーは「詩人のように人間は住まう」という講演の中で、住まう（目的）は、一戸建てか集合住宅かや、郊外か都心かの通俗的な概念を捨てて、人が生きることにおいて目指したいことであると説いている。ハイデガーはヘルダーリンの言葉を引用しながら「人間は大地に成長するものをはぐくみ育てたり、そして自分が責務を負うものの世話をする。はぐくみ育ててそして世話すること（colere, cultura）とは、あ

る種の建てることである。・・・建てられたものとは、建築物であるばかりでなく、また人間の手と手だけによってつくられたあらゆる仕事や作品でもある」(ハイデガー, 2008)と述べている。建築を大地に建てることは手段であるが、目的に天上的なものに向かって生きる、住まう、はぐくみ育てることを慈しむように大切にすることをコンセプトとして鮮明にし、この目的に向かっての手段の位置づけを推し測ることをしてこそはじめて、人間は人間になるのである。住宅、道路、河川、福祉、教育、経済等、全ゆる領域の技術・制度の現代的展開において「何をめざして生きるんや」をたゆまず問い続けることが、実践政策学の発想法である。

1.3 目的・手段の間を結ぶ学習

目的・コンセプトにこだわってコトを運ぶ発想を豊かにするためには何が大切なのか。「よく生きる」ための行為と言葉の繰り広げるプロセスの遂行のことを「エネルギー」(実現態、遂行)と、アリストテレスは呼んだ(桑子, 1993)。「よりよく生きる」目的と実現の活動・手段の間を結ぶためには「学習する」という運動によって獲得される知的能力の分かち合いが遂行される。研究者、住民、NPO、行政等の交流・協議において、異なった価値・立場の主体間の対話の実践を通じてそれぞれの心の窓が開かれ、「何をめざすか」のコンセプトと実現手法の系が同時的に共有されていく。主体間の特異性・多様性との出会いは、往々にして「ズレ違い」「葛藤」「遠慮」等で、うまく進まない場合もあるが、それを乗り越えて親密な双方向的コミュニケーションを交わすことにより、脳の協働の流れやネットワークが生成していく。対話的想像力の翼がひろがると思の鼓動が生成し、脳の協働の行為は高まる。そのことは一方では「多様性の統一」を、他方では「多様性・複雑性の相互理解」をもたらす。

そのプロセスを通じて「何のため」のコンセプトが共有されるとともに、目的と手段の融合化が行われ、人々の間に共通感覚、つまり「健全な人間的知性」と呼ばれる常識が発見され共有される。実践政策学の特質は、目的そのものと、目的と手段融合の学習過程にある。

2. 実践政策学の知的生産の特質

人間・環境・技術(制度)の三位一体、目的・手段・学習の三元連関に続いて、いまひとつ実践政策学の知的生産の特質として「自省」「感応」「文脈」は見逃せない。

2.1 自省・リフレクティブ

まずは「自省的・リフレクティブ」な思考法である。実践政策学では私発協働、すなわち自己の内発的発想と動きが他者と相まって協働するプロセスの進行の中で生成する感覚的ファクターの多数多様性といったものを重視するが、主観性に偏りすぎることなく、自己の活動に言及することによって、自分自身を客体化する自省的思考態度に注目し、「目的と手段の融合」に加えて「主体と客体の融合」化を図る。例えば、絵本『3びきのかわい

オオカミ』は、強さに対する強さのぶつかり合いを越えて、自省的発想転換によって強さを補う弱さ・美しさ・優しさの大切さに気づかせる物語である。そこには、常識的発想が対立を強め自他の生存を危うくする時、自ら発想を転換させることで、対立するものを並び立つ、共生の関係に移行させる間柄づくりがなされている。また『としょかんライオン』は、トラブル発生の過程の中で「ルールは状況如何によって破ってもよい」という発想転換を示唆している。絵本は子どものものという常識を超えて、研究者も市民も行政も全ゆる人々の身体の中に眠っている想像力という小さな力が呼び覚まされ頭在化させる自省への発想転換の大きな力をもつ(延藤, 2015)。

2.2 感応・レスポンス

実践政策学の知的生産上の特質の第2のキーワードは、「感応・レスポンス」である。「川の日」ワークショップ(現在は「いい川・いい川づくり」ワークショップ)が1998年から行われており、それは全国の住民・行政協働の河川整備・活用プロジェクトの発表と公開選考の場である。筆者はその総合コーディネーターを務めていたある年のこと、阪神大震災後の淀川の堤防強化工事のケースが行政担当者から発表された。彼は口頭発表において「ある夏の日、自分の小1の息子を現場に連れて行って“お父ちゃん、こんなに強いエエモンつくったんや、お前も土木技術者になれ”というたら、息子は一言“ここアツイ!木陰ほしい!”といいよった。その一言で気づきました・・・」と。このエピソードは、河川環境は安全上機能的に完全に整備されるだけではなく、住民の生活空間としての場のしつらえの必要性を示している。「人がつくる環境は、利用者がその場所を選ぶ度合いを最大にすることによって、場所と人との関わりを豊かに民主的・基本装置として提供すべきである。」こうした場所を感応的・レスポンスと呼ぶ(ベントレイ他, 2011)。実践政策学は、人間の感応する環境デザインを重視する。

いまひとつ「感応する」ことで重要なのは、研究者自らが共感・感応するセンス・態度をもつことである。『新しい野の学問の時代へ』で著者・菅豊(2013)はこう述べる。“新しい知識生産と社会実践において、研究者は他者(市民・環境)に「共感」をもって接し協働することは当然であるが、「共感」するにはシンパシー(sympathy)とエンパシー(empathy)があることを区分けしてかかりたい。シンパシーは、日本語でいう同情や同感・感情移入であり、「弱者・劣者への憐憫」と単純に結び付きやすい心の動きである。一方、エンパシーは自己移入であり、能動的に人びとのなかに入り込んで理解し、その人びとを想像するような動きといえる。「他者のなかで自己を感じ、体験し、理解する方法」としてのエンパシーからの感応の態度は、過剰な「感傷」でも「共感の欠如」の何れでもない。”(菅, 2013)

人間・環境・技術(制度)の三位一体を目指す思考と実践の過程において、主体間で「感応の往還」を取り交わす知的生産(六車, 2012)を目指したい。

2.3 文脈・コンテクスト

実践政策学における知的生産の特質の第3は、「文脈・コンテクスト」である。気候変動をもたらす深刻な危機を回避することのできるエネルギー社会への転換が求められる中、再生可能エネルギー供給の拡大は各地域でしっかりと進んでいる。その中で、メガ・ソーラーパネルが大量設置され地域の自然風景を台無しにしている場のひろがり気が気かりである。技術むき出しによる自然景観破壊は、環境文脈の中で技術・制度を適用する発想の欠如による。

建築であれ土木であれ設備装置であれ、あらゆる構築物はモダニズムを乗り越えるところに、実践政策学の動機がある。即ち、モダニズムは均質で普遍的な合成材料や規格化、大量生産を重視し、環境文脈を軽視し、時には破壊してきたが、これからは「環境の中から育まれるまち」や「ハードとソフトの融合を育む環境」の文脈づくりを重視したい。

アスファルトやコンクリートむき出しの駐車場が都市の風景を荒廃化させているが、透水性舗装とミニ緑化により魅力的な景観をまち角にひろげる雨庭パーキング（森本, 2015）など、多様で具体的な人間・環境・技術の柔か一体化の場をあちこちに広げ、人々の心にホッとさせる気もちを授けてくれる文脈・コンテクスト配慮のまち育てをすすめたい。

実践政策学は、これまで研究機関と地域社会でしばしば分離されていた境界をつなぎとめ、自省的・感応的・文脈的思考法やプランニング法の知的生産の成果を相互に分ちあひ、協働しあひ、交換しあひ状況を促進する（Bose et al., 2014）。

3. 実践政策学の構図

近代科学は、思惟する自己と意識のない他者（対象）と世界を二分化し、科学が生み出す「人工的世界」は、

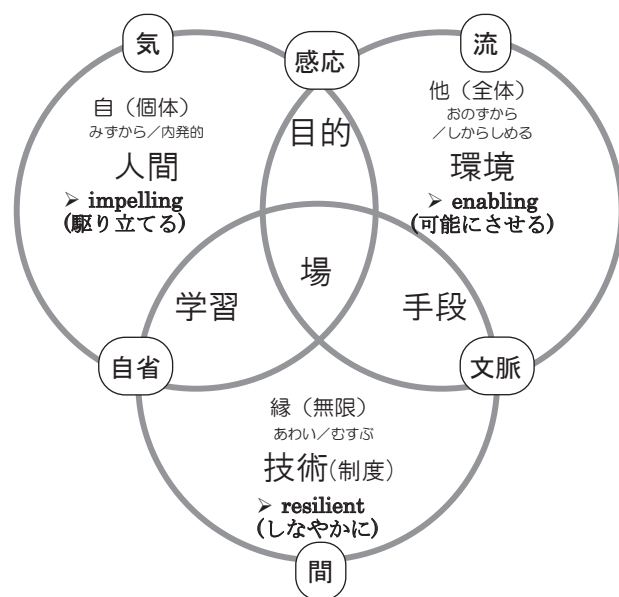


図1: 実践政策学の基本構図

人間にとって「疎遠な」ものになってしまった。そのような疎外された世界から人々を解放するために、実践政策学は二分法を越えて、自・他・間／人間・環境・技術／目的・手段・学習 等の三次元連関に認識法をシフトさせることによって、生き生きとした具体的人間の環境の関係・協働・創造という基礎的な層から出発し、感官と感覚、本能と直覚、気分と感情などがもっている世界を開示する機能を有効に働かせようというアプローチをとる。その構図を描いてみると図1のようになる。

3.1 自／他／あわい

実践政策学体験の最初のチャレンジは、“他者”をみることである。もし研究者やプランナーがまち育てにおいて“他者”と相互関係を紡ぐことになれば、彼らは自分自身の中にあるものとは違うアイデンティティや差異性を知り、かかわり、向きあうことになる。彼らは自己と“他者”のあわいをぼかし、アカデミアとコミュニティの境界を解くことになる（Angotti et al., 2011）。

実践政策学は「みずから」（自）と「おのずから」（他）、「個体」と「全体」の関係としてとらえる。「個体」と「全体」というのは「部分」と「全体」とは相異なる関係である。「部分」と「全体」は「部分」が「全体」の中に包含され、「部分」は「全体」の一部であるという関係であるが、「個体」と「全体」というのは、互いに対等な相反・相和・相生の関係である。相反することもあると同時に、相互に和しながら生かしあう関係である（竹内・金, 2010）。

「個体」と「全体」の関係をむすぶ「あわい」というのは、「連続・調和・統合のはたらきであると同時に、それだけではなく断切・反転・離脱のはたらきが複雑にからみあう相関運動である。」人間と環境をむすぶ技術（制度）は、すべてがほどよく繋がり、調和し統合されている状態だけではなく、「変動・進化・改革への力働」（竹内・金, 2010）を作用させるダイナミズムを孕むものでありたい。

3.2 気／流／間／場

そこで目指しているのは、単なる知識・技術ではなく、人間・環境の生き生きとした「間」柄づくりによって、専門家と非専門家がよりよく生きる「場」を分かちあう宇宙的生「気」の「流れ」が浸透する状況づくりである。つまり「生氣」の「流れ」によって、人間も環境も共生しあう関係を紡ぎ進化させることになる。

地球環境問題も超高齢化問題も子ども教育問題も、現代世界の多面的「危機」を超えるために、市民・研究者・行政等がみずから内発的に駆り立てられるように（impelling）、環境をよりよい状況に可能にさせる（enabling）ように、ソフト・ハード両面の技術（制度）をしなやかに（resilient）に開発・適用・自省・改善するプロセスが、この学がねらうところである（Hester, 2006）。そこでは科学という理論的・抽象的なものを、日常経験という具体的・直感的なものを、大きな全体的生の現象の中でのように連携・協働するかが問われる。そのことに向けての「張りつめた流れ」づくりへの志向・態度がかかわる諸主体

に求められる。そうでなければ「気」づまり、「間」ぬけ、「場」ちがいを生む。

3.3 わくわく&リーズナブル

実践政策学は「エコロジカル・デモクラシー」即ち「参加と協働による環境親和型社会」づくりを目指す。そのための中長期のヴィジョンをつくり、実現のための多様なプロジェクト・デザインを図っていききたい。その際にここに示した実践政策学の大枠（方法）を具体的に作動させるには、地域からの小さなイマジネイティブなアイデア・手法・活動を呼び集め、楽しみながらリフレクティブな自省的まち育てに赴きたい。実践政策学は「わくわく&リーズナブル」なスタイルを重視し、楽しく進めながら筋道だった合理的手法を発見していく（延藤，2013）。状況がどんなに悲観的であれ、楽天的に課題に赴き、多様な主体の参加と協働によって「有機的生命体」としての都市・地域を再生・再創造する道を楽しみながら歩みつづけたい。

引用文献

- Angotti, T. et al. (2011). *Service-learning in design and planning*. New Village Press.
- ベントレイ, I. 他 (2011). 佐藤圭二 (訳) 感応する環境—デザイナーのための都市環境デザインマニュアル—. 鹿島出版会.
- Bose, M. et al. (2014). *Community matters: Service-learning in engaged design and planning*. Routledge.
- 延藤安弘 (2013). まち再生の術語集. 岩波書店.
- 延藤安弘 (2015). こんなまちに住みたい—絵本が育む暮らし・まちづくりの発想—. 晶文社.
- Hester, R. T. (2006). *Design for ecological democracy*. Massachusetts Institute of Technology.
- ハイデガー, M. 詩人のように人間は住まう. 伊藤哲夫・水田一征編・訳 (2008). 哲学者の語る建築—ハイデガー、オルテガ、ペゲラー、アドルノー. 中央公論美術出版.
- 桑子敏雄 (1993). エネルゲイア—アリストテレスの哲学の創造. 東京大学出版会.
- 森本幸裕監修 (2015). 雨庭のすすめ. 京都学園大学ランドスケープデザイン研究室.
- 六車由実 (2012). 驚きの介護民俗学. 医学書院.
- オニール, J. (2011). 金谷佳一 (訳) エコロジーの政策と政治. みすず書房.
- 菅豊 (2013). 「新しい野の学問」の時代へ—知識生産と社会実践をつなぐために—. 岩波書店.
- 竹内整一・金泰昌 (2010). 「おのずから」と「みずから」のあわい—公共する世界を日本思想にさぐる—. 東京大学出版会.

Abstract

The goal of policy and practical studies is “Environment-friendly Society” which has three fundamental and interrelated traits of Person, Environment and Technology (System). For policy

and practical studies to be valued and flourish in research / practice, a broader conceptualization of research and practice is needed. This involves integrating the end, the means and learning. Policy and practiced studies is active and engaged learning in which professional researchers and planners become knowledge producers of reflective, responsive and contextual thinking and planning. Policy and practical studies promote partnering, collaborating and exchanging of knowledge across divides or boundaries that all too often separate rather than unite universities and communities. The first challenge in policy and practice studies experiences is to see “the other”. If researchers and planners are to interact with “the other” in community settings, they must learn to perceive, engage, and confront issues of identity and difference, including their own. They must penetrate the boundaries between self and “the others” just as they confront the boundaries between academia and community. For realising “Happiness is sharing” between person and environment, it is necessary to combine of impelling well-being, enabling forms and resilient technology(system), and it makes life, liberty and the pursuit of sustainable happiness.

(受稿：2015年9月10日 受理：2015年10月8日)